

昭和62年度

石塚古墳

範囲確認調査概報

新木山古墳外堤

範囲確認調査概報

1988

広陵町教育委員会

序

我々は、開発と保存との調和を図りながらより多くの文化遺産を次の世代へ継承していく大きな使命もっています。

豊かな文化遺産が眠る奈良県は原始・古代の中心地であり、なかでも広陵町は奈良盆地の西辺にあって、盆地の三大古墳群のひとつである馬見古墳群を擁しており、数多くの大型古墳が営まれています。

この馬見古墳群の中央部に位置する石塚古墳は、円墳と認識されてきましたが、調査の結果、全面に葺石を施し、周濠・外堤をもつ帆立貝式古墳であることが判明しました。

新木山古墳外堤の調査では、その形態・規模を確認することができました。

本書はこれらの発掘調査成果の一部をまとめたものです。幾分なりとも御活用いただければ幸いです。

最後に本調査の実施、古墳の保存に御協力をいただいた関係者に厚くお礼申し上げます。

広陵町教育委員会

教育長 上村 恭三

例 言

1. 本書は広陵町教育委員会が昭和62年度国庫補助事業として実施した奈良県北葛城郡広陵町大字三吉小石塚に所在する石塚古墳の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は橿原考古学研究所の指導を得て、広陵町教育委員会社会教育課が実施し、現地調査は井上義光があたった。
3. 調査にあたっては広陵古文化会、同会長坂野平一郎氏、文化財保護調査会、大字区長である藤井清治氏に、御理解と御協力を賜った。記して感謝します。
4. 調査補助員として浅尾一宏、杉田雅彦（大阪外国語大学）、植松洋（京都大学）、多田慶子、青山和代の諸氏が参加した。
出土遺物の整理作業にあたっては多田慶子氏、見田幸氏の協力があつた。
5. 作業員として生島義二、森川金治郎、松井正一、吉岡敏夫、平井藤太郎、吉崎清七、藤井清治、野村千代治の諸氏が参加した。
6. 墳丘葺石については橿原考古学研究所所員、刑部小学校教諭奥田尚氏に鑑定・分析いただき、玉稿を賜り、Ⅳ章として掲載した。
7. 本書の執筆及び編集は井上がおこなつた。

目 次

I 契機と経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の概要	4
1 古墳の立地と現状	4
2 各トレンチの調査概要	5
3 中・近世墓	11
4 出土遺物	14
IV 石塚古墳の石材について	(奥田 尚) 17
V 結語	20

I 調査の契機と経過

広陵町は奈良盆地の西辺に位置し、肥沃な低湿地を背景として、盆地に沿って延びる低位丘陵上には特別史跡巢山古墳をはじめ大小数十基の古墳が築造されている。これらは馬見古墳群とよばれ、奈良盆地北部の佐紀古墳群、盆地東辺部の柳本古墳群とともに奈良県下有数の大型古墳の密集地帯として知られている。

石塚古墳は馬見古墳群のほぼ中央、陵墓参考地に指定されている新木山古墳の西側に築造された帆立貝式古墳である。

発掘調査は近年著しい宅地開発造成等から古墳を保護し、史跡指定を受けるための基礎資料を得るため、広陵町教育委員会が昭和62年度国庫補助事業として範囲確認調査を実施したものである。

事業計画については、奈良県教育委員会文化財保存課の指導を受け、調査については奈良県権原考古学研究所の助成のもと広陵町教育委員会がおこなった。



写真1.2 現地説明会風景

調査は古墳及び周辺部の測量図の作成と墳丘の範囲、規模及び周濠、外堤の有無を確認するため墳頂部から放射状に8ヶ所のトレンチを設定し、さらに墳形を確定するためのトレンチをいれて実施した。

調査は昭和62年5月11日から7月25日まで行なった。

II 位置と環境

馬見丘陵は奈良盆地の西部に位置する南北に長い低位丘陵である。西は葛下川、東は高田川で限られる。また北流する両河川が合流する大和川が丘陵の北限となる。南北約7km、東西約3kmの長楕円形の丘陵である。西側には二上山塊、東側に奈良盆地が広がる。丘陵内部には小さな佐味田川と滝川が南から北へ流れ、丘陵を三分する。標高は65~80mで盆地との比高差は20m前後である。丘陵は南北走向の主幹尾根とそこから派生する小尾根と小谷で形成され、尾根部分には雑木林と畑地が営まれ谷間には小

規模な水田が形成されている。丘陵南部には広陵町から香芝町にまたがる広範囲に真美ヶ丘ニュータウンが広がっている。(註1)

石塚古墳は三支丘のうち、高田川と佐味田川に挟まれた丘陵上に位置し、この主幹尾根から西側に派生する尾根上に位置する。



図 1 石塚古墳周辺の遺跡 (15石塚古墳)

馬見丘陵の東斜面には特別史跡菓山古墳をはじめとする大型前方後円墳が連なり、盆地東部の柳木・大和古墳群、盆地北部の佐紀古墳群とともに奈良県でも有数の大型古墳の群集地帯であり馬見古墳群と総称される。

しかし、「墓域を共通とする一つの集団によって形成された古墳のグループ」として古墳群を理解するならば馬見古墳群という呼称自体に問題がないわけではない。つまり丘陵上に位置する大形古墳群も決して、連続した位置に形成されるわけではなく、古墳の分布密度により、大別して3グループとして認識されている。川合大塚古墳(1)を中心とする北部の一群、菓山古墳(13)、新木山古墳(14)、乙女山古墳(6)を中心とする中央部の一群、新山古墳(22)、菓山古墳(27)を中心とする南部の一群、さらに香芝町別所石塚(24)、城山第1号、第2号墳(25)とする一群、安部山古墳群等も単独の古墳群として認識できうる。

北方の一群は全長200mの前方後円墳、川合大塚山古墳を盟主として周辺に城山古墳(2)、中良塚古墳(3)等の100m前後の前方後円墳が築造され、これらに小規模な円・方墳が付属する。川合大塚山古墳は、出土する埴輪から5世紀中葉以降に相応する時期が考えられ、烏ノ山古墳(4)に後続する前方後円墳である。これら北方の一群が大和川、曾我川などの河川が合流する低地の微高地上に立地することから低湿地に経済的基盤を持つ点で共通性をみだし、中央群、南群との経済基盤の違いが指摘されている。

中央部の一群は菓山古墳(13)、新木山古墳(14)など全長200mを越す大型前方後円墳、ナガレ山古墳(11)、倉塚北古墳(19)、倉塚古墳(10)など100m前後の前方後円墳が続く。このほか、中央群には帆立貝式古墳のなかで、最大規模を計る乙女山古墳をはじめ池上古墳(15)、佐味田孤塚古墳(12)、三吉2号墳、石塚古墳(15)が密集する。これらとやや離れ、佐味田川を挟んだ丘陵内部には、4世紀後半の佐味田宝塚古墳(16)、佐味田貝吹山古墳(17)が築造されている。丘陵中央部の宝塚古墳の南西300mには、6世紀後半から末葉の巨大な横穴式石室墳である牧野古墳(18)が築造されている。舒明天皇の父にあたる押坂彦人大兄皇子の成相墓の可能性が指摘されている。(註2)

南群は4世紀中葉頃に築造された前方後方墳である新山古墳(22)、全長210mの大型前方後円墳菓山古墳(27)が築造されている。菓山古墳(27)の丘陵南西、香芝町孤井に位置する孤井城山古墳(29)も単独で存在し、埋葬施設は明らかでないが6世紀初頭の築造時期が考えられている。

さて南群のうち新山古墳から菓山古墳への変遷のなかで、その空白期間を補充する時期の古墳群が調査されている。全長80mを計る柄鏡形の前方後円墳モエサシ3号墳は、粘土椀等を埋葬施設として採用する。この他に南群は前方後方墳の密集地帯でもあり、黒石5号墳、エガミ田3号墳が築造されている。

菓山古墳の築造時期を知る手掛かりはほとんどなく、東側外渠の調査時に円形透しの円筒埴輪が出土している。また菓山古墳周辺の古墳から運ばれた可能性のある退化傾向の長時形石棺が石棺仏として残っている。

註1) 白石太一郎、前園実知雄「馬見丘陵における古墳の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告

III. 調査の概要

1 古墳の立地と現状 (別添図)

石塚古墳は馬見丘陵と呼ばれる低位丘陵のうち高田川と佐味田川に挟まれた丘陵上に位置し、南北走向の主幹尾根から西北に派生する小支丘を利用して築造されている。

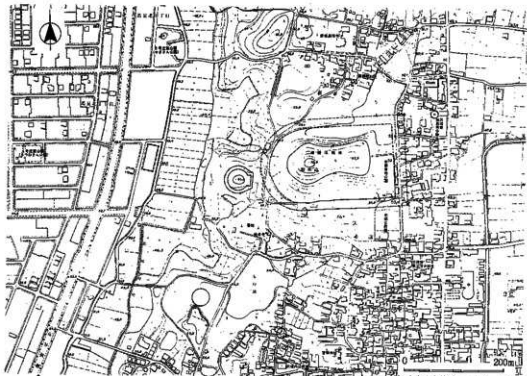


図 2 石塚古墳周辺地形図

本墳は丘陵中央部に密集する一群からやや離れ、新木山古墳の西側に立地する。当墳の北方約600m、特別史跡果山古墳の西には三吉2号墳、佐味田孤塚、やや北上して乙女古墳、池上古墳と帆立貝古墳が続く。

発掘調査以前は前方部北側になされた針葉樹の植林以外、竹林が墳丘全体を覆うように密生していた。また、墳丘の南側には開墾のなされた跡も残されていた。野淵竜潜の「古墳墓取調図」(図3)によれば墳丘の北西部には松が生え、墳丘中段以上には植林、東側は茶畑となっていたことがわかる。当時から墳形は円形と認識されており、帆立貝古墳であることは、調査を行ない判明した。

墳丘測量は等高差25cm、縮尺1/100で行ない墳丘及び周辺地形を網羅すべく測量し、その範囲は南北

150m、東西160mほどになった。いま一度測量図から古墳の現状を観察すれば、東西方向の土地境界溝が墳丘主軸に沿って縦断し、墳頂から南々西方向に延びるものも見られる。また前方部には南北に直線的に延び逆L字状に西方へ屈曲し、南側の灌漑用池につながる溝が掘られている。墳丘の北側に大小十数箇所の削平部分が見られ、外堤端にあたる部分も長さ60mに及ぶ削平のため墳丘北側の調査トレンチでは確認できなかった。比較的旧況を留めている南側でも墳丘南東部で地下げが行なわれている。

測量の結果、現在の墳丘規模は、全長45m、後円部径40m、後円部高6.5m、前方部長7m、前方部幅22.5m、前方部高3mを計測した。墳丘主軸は $N-85^{\circ}-W$ にあり東西する帆立貝式古墳であることを確認した。

墳丘の基底は標高57.75mの等高線で南西部で弧状に廻る以外は不整形なつながら方をする。

また、調査の結果から標高59.25m付近に段が設けられているが、測量図には表われない。

周濠、外堤は等高線が標高57.00m～57.50mで平坦となっているためその存在が認識できる程度である。旧状が良く保存されている墳丘の南西部では標高57.25mの等高線が墳丘基底線と幅約8mの間隔を保ち廻ることから周濠幅はそれ以下であることが予想された。

2 各トレンチの調査概要

調査トレンチは墳丘規模、範囲を確認するため合計8箇所設定し、さらに墳形を確定するために1箇所増設した。トレンチの設定は墳頂部に認意の点を設け、そこから放射状に設定し、調査順に第1～8トレンチとし、第4トレンチは、折木山古墳の外堤との関係をつかむため、さらに延長した。以下、各トレンチの調査内容について記す。

第1トレンチ (図5. 図版1)

後円部墳頂から磁北方向に幅2m、長さ約17.5mで設定した。墳丘部に大きな削平が認められていたためその端緒を墳丘中位に求め設定した。

墳丘部では表土下約10～20cm程で葦石が検出され、削平による顕著な葦石の流出は認められなかった。しかし、墳頂付近では葦石がはがれ墳丘盛土が露出する部位もある。墳頂付近の葦石流出に比べ、下方

第七の五編
 前瀬郡馬見村大字三吉
 石塚古墳
 一山林合又別上立畝廿八歩
 其有記



図3 石塚古墳絵図 (野淵電潜作図) 乙

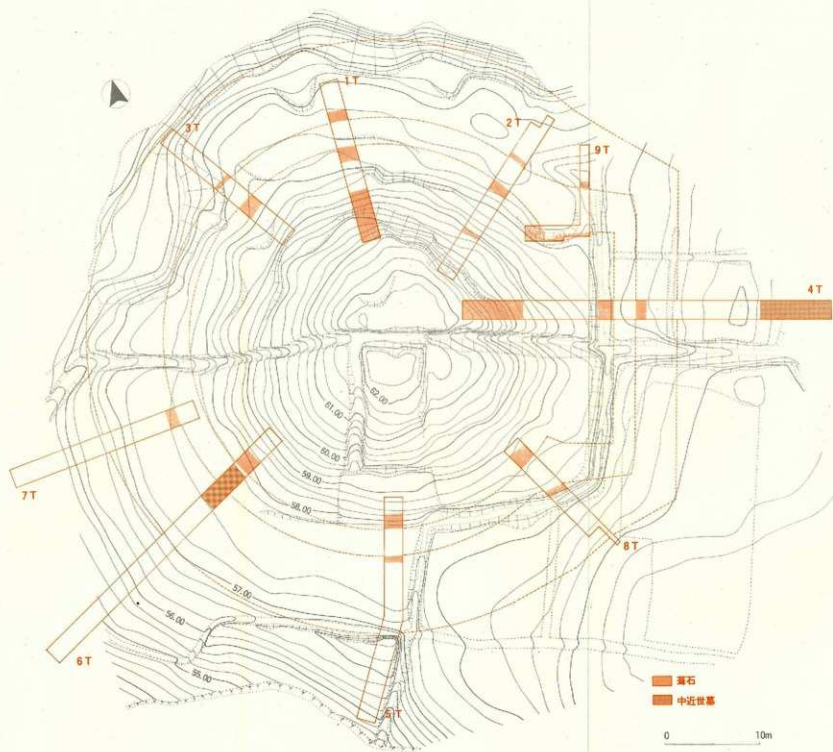


図4 石塚古墳トレンチ配置図 (1/400)

では葦石が良くのこされていた。葦石は標高59.20 m付近から傾斜角 24° で葦かれており約4 mにわたり検出した。

葦石は最大で長さ30cm程度の輝石安山岩を使用しており、葦石を側面からみると標高59.20m~60.00 mまでは比較的大形の石材を横長に列べその上に小形の石材を積むことを再度繰り返しているようである。

第2トレンチ (図版2)

第2トレンチは、墳丘部から北東方向に幅2 m、長さ20mで設定した。このトレンチでは墳丘部の葦石が削り取られており、葦石の基底が一部残されていたにすぎない。しかしそれ以外は、墳丘と段、段と埴輪列の旧状が残されていた。

第1トレンチでは葦石灰以下が大きく削平されていたが第2トレンチでは、墳丘葦石の起点部が傾斜変換点になっており段が存在したことがわかる。段は約1.5~1.7mの平坦を保った後、再び傾斜はじめる。この段の外寄りに円筒埴輪が1点だけ原位置を保っていた。

これを第1トレンチ間まで追うと、はたして埴輪列が検出された。段から傾斜角約 24° でゆるやかな傾斜となった墳丘第1段は周濠に達する前に再度傾斜変換点をむかえる。それは濠底から約1.5mの地点であり、傾斜角は 28° を計る。詳細については後述する。

第4トレンチ (図6・7・8、図版3・4)

墳丘部から古墳の主軸に沿って東面する前方部に向け幅2 mで設定し、新木山古墳の外堤との関係を調べるために東へ延長し調査を行なった。

調査地点が、東西方向の土地境界溝の北側であったため、その盛土に保護されて、円筒埴輪列、葦石が良好な状態で遺存していた。

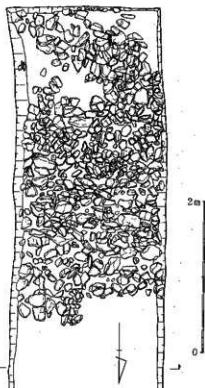
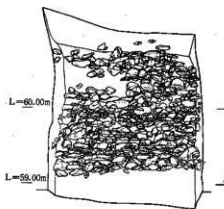


図5 第1トレンチ葦石実測図

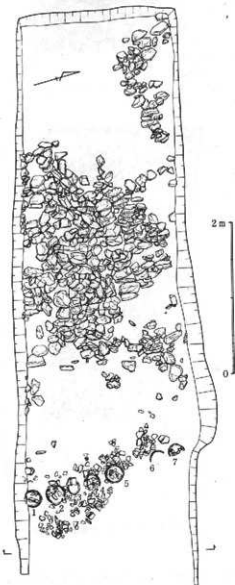
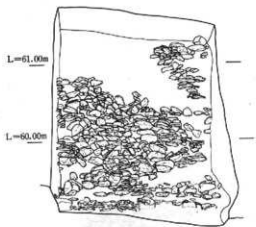


図 6 第4トレンチ基石、埴輪列実測図

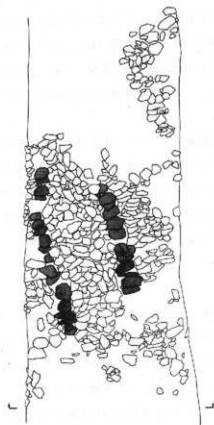
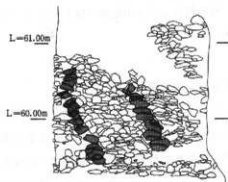


図 7 第4トレンチ基石単位図

葺石

墳丘第二段傾斜面に葺かれたもので、標高59.20mから61.00mまで約3mにわたり遺存していた。傾斜角は24°である。

葺石は直径30cmのものから10cm以下のものが使用され、中央で検出した目地の北と南でその葺き方が異なり、それによって石材種も異なるようである。

目地は直径30cmのほぼ同じ大きさの石材を標高線と平行に長軸方向で使用し、墳頂点方向に向け縦方向に積まれるもので、長さ1.6mにわたり検出した。また、これと対応する目地がトレンチの南壁側に認められる。中央部の目地に使用される石材ほど長さが揃わないが円形に近い石材でも、長軸方向を使用しようという意図が明瞭に看取できる。標高59.20mから61.00m付近にまで認められる。

両目地間の距離は約90cmで葺石の使用法、使用石材も異なる。中央部で検出した目地の北側では直径20cm前後の、平たい輝石安山岩を多用し、等高線に石材の長軸が平行となるように積みあげられている。北側の葺石が中央部の目地石にくい込むため、介石的な役割をはたしていると思われる。これは南側の目地とさらにその南の葺石の状況と共通する。

つまり、第4トレンチで検出した目地はそれぞれ北側、南側葺石施行時に同時に積まれ、積み方も類似する。これに対し、両目地間の葺石をみれば、石材も輝石安山岩に流紋岩、花崗岩、閃緑岩等が含まれ、積み方も長短軸を意識せず、方向も不定である。

円筒埴輪列

幅約2mのトレンチ幅で8本を確認し、7本が樹立した状態で残存していた。円筒埴輪は葺石の基底石推定ライン（墳丘傾斜変換点）から約1.2～1.4m離れて樹立され、後円部中心点から約15mの位置にその底部が標高59.10mで弧状に立て並べられる。

円筒埴輪の芯々距離は24cm～30cm程で円筒埴輪間の隙間は10cm以下である。密に樹立される円筒埴輪には数本毎に朝顔形埴輪が含まれることが周辺に散乱する破片からわかるが、埴輪の遺存状態が悪くその単位は不明である。

埴輪は布掘りによる掘り方の中に立てられるが、掘り方は深さ10cm程度で断面逆台形を呈する。尚、この掘り方の土上に葺石に多用される輝石安山岩片が含まれることから葺石施工後に円筒埴輪列が樹立されたことがわかる。

周濠

目地が明瞭に看取された第4トレンチでは墳丘第1段から緩傾斜を保ちながらやがて前方部端にいたる。前方部端は標高58.50m程の高さを持ち、葺石も施されていたと考えられるがやはり、その上半部を土地境界溝で削平されていた。

前方部側の周濠は上端で幅3.5m、濠底で1.5m



写真3 第4トレンチ周濠内土層堆積状況

を計り、填丘側、外堤側にも葦石が施されていた。

前方部側では前方部上端から標高56.80mの濠底まで約1.5mの比高を傾斜角 34° で下り、葦石は約1m程遺存していた。外堤側は前方部より傾斜が緩く葦石材が異なっていた。前方部前面には後円部周濠部には見られない大型の花崗岩が多用され、外堤部側では人頭大以下の輝石安山岩で構成されていた。

第7トレンチ (図9)

第7トレンチは墳頂部から西南西方向に向け、周濠から幅2m、長21mで設定した。

周濠内法の葦石遺存状態は悪く基底石さえ残されていない箇所もあったが、外堤規模が確認できた。

外堤盛土は表土下約30cmで明黄褐色を呈する粘質土(15)から(18)にかけてであり厚さ約40cm、長さ7mにわたり検出した。(19)は地山土である。この外堤盛土の外端は小土坑によって攪乱されているため外堤外端は不明であるが、外堤規模は、土層堆積状況から8m前後と考えられる。

第8トレンチ (図10. 図版5)

第8トレンチは、くびれ部に近い周濠部から外堤側に設定したもので幅2m、長さ15.5mである。濠幅は上端で約6m、濠底で約3m程であったと考えられる。填丘部葦石は標高57.20mから約1.5m程遺存していた。外堤部側では同じく標高57.20mから約1m程違っていた。外堤部の葦石基底が「く」字に屈曲するのは填丘くびれ部に対応していると推定される。

第9トレンチ (図11・12. 図版6・7)

第9トレンチは、くびれ部の状況を調べるため墳丘の北側に設定したトレンチで、後円部から前方部基底石を追って「U」字形に設定した。

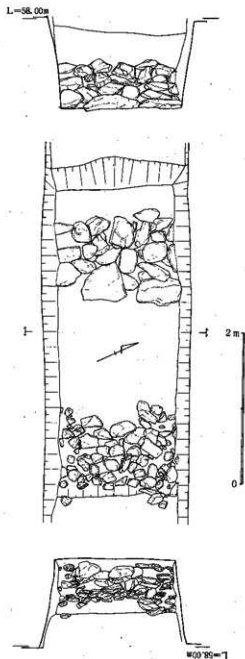


図8 第4トレンチ周濠葦石実測図

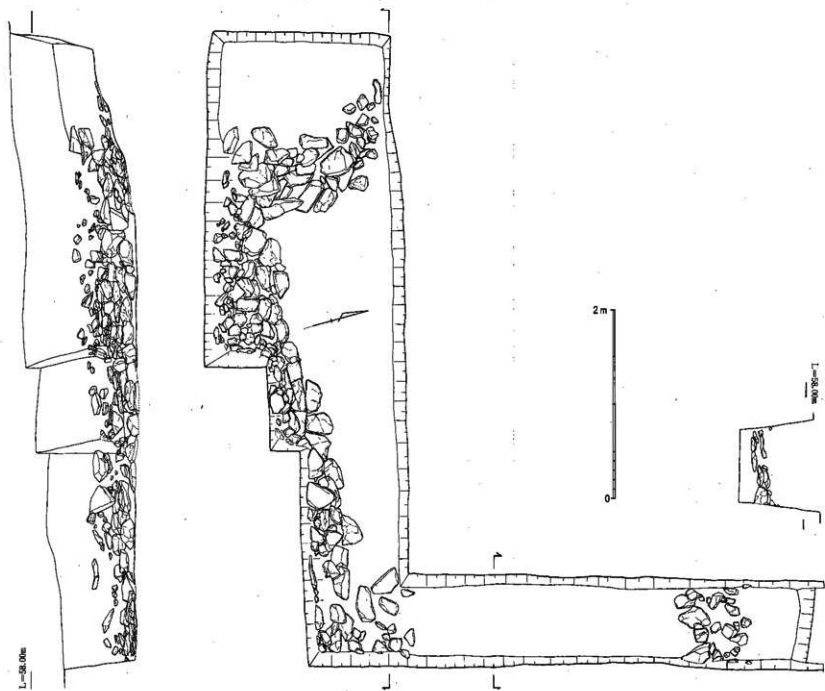


図 11 第9トレンチくびれ部築石実測図

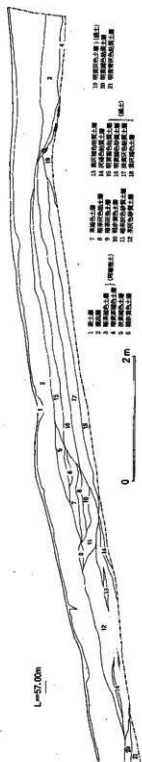


図 9 第7トレンチ西壁土層断面図

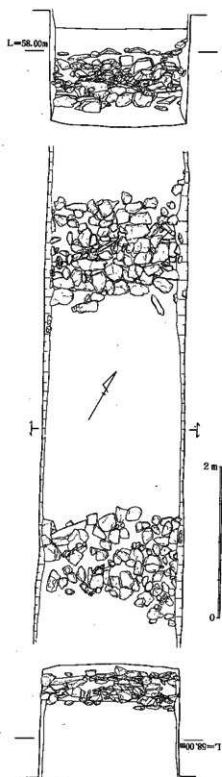


図 10 第8トレンチ周縁葺石実測図

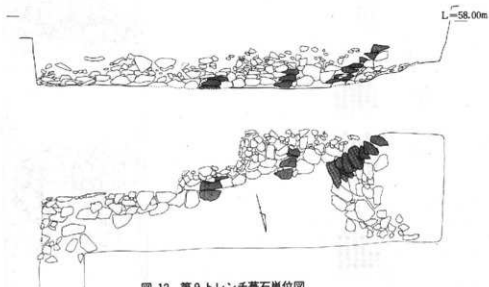


図 12 第9トレンチ葺石単位図

このトレンチにおいても葺石に目地又は、作業単位が認められた。一つはくびれ部の屈曲点である。標高57.00mから長径40cm程の石材を長軸を等高線に平行にして後門部頂に向け9石を積みあげていた。ここから後門部側へ続く大型の基底石は2・3石後に小型化していく。屈曲点から前方部に向け4番目の基底石も作業単位の起点と考えられ、基底石列に平面的な段差が認められた。さらに屈折点から数えて9番目の基底石にも平面的、レベル的な段差が生じていることはここに作業単位の区切りがあったことを裏付けている。

使用される石材は、やはり後門部からくびれ部にかけて輝石安山岩が多用され、前方部に近づくと、花崗岩、流紋岩が多く使用される傾向にある。

3 中・近世墓（図13～16、図版8・9・10・11）

墳丘及び外部施設を確認するため設定したトレンチで中世墓、近世墓群を検出した。まとめて記しておく。

中世墓

墳頂部から南西方向に幅2m長さ39mで設定した第7トレンチで中世墓を検出した。周濠部を起点として設けた第6トレンチでは、墳丘葺石が標高56.90mから57.60mにかけて約1.5mにわたり施されていたが、これに対応する外堤側の葺石が見当らなかった。それは葺石が中世墓に転用されたからであった。中世墓は外堤部を削平し、濠底部に方形石囲いを構築するものである。方形石囲いは一辺2m程に復元され、北辺と東辺は遺存状態が良くない。石囲いの中央部には炭化物の広がり認められ、内部からは火葬骨片と瓦器片が出土した。収骨施設、骨蔵器等が認められないことから厳密には火葬施設とい

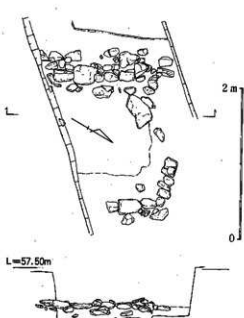


図 14 中世墓実測図

うことになる。恐らく火葬施設としての機能終了後に方形石囲いを施したと考えられ、その時期は瓦器から鎌倉時代後期と考えられる。

近世墓群

第4トレンチの延長、新木山古墳の外堤に近接する部位で総計12基の近世墓群を検出した。内訳は、瓦質の甕、広口壺を外容器として有機質の骨蔵器を覆うものが10基、その他は有機質の骨蔵器の上に蓋として平瓦を置くもの、五輪塔等の石造物を外部表象とするものがある。

近世墓1～5

いずれも外容器よりやや大きめの土抗を穿ち、有機質の骨蔵器に火葬骨を収納し、その上から瓦質の甕又は広口壺を外容器として倒立させて覆ったものだが骨片、有機質骨蔵器は皆無である。

近世墓6

長径62cm、短径48cm、深さ30cmの土抗を穿ち径約30cm

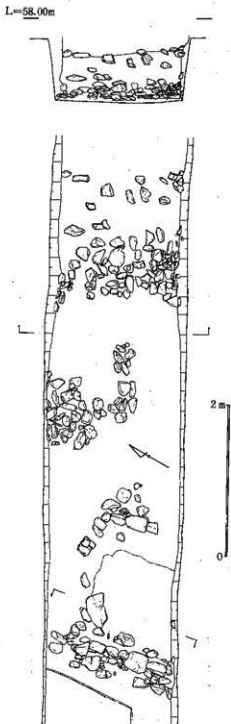


図 15 第6トレンチ墓石、中世墓実測図

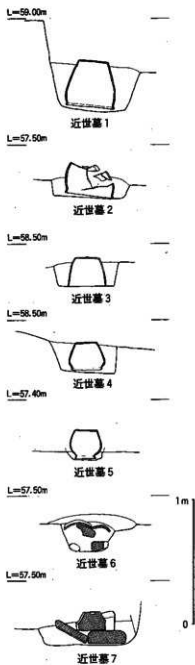


図 15 近世墓群断面図

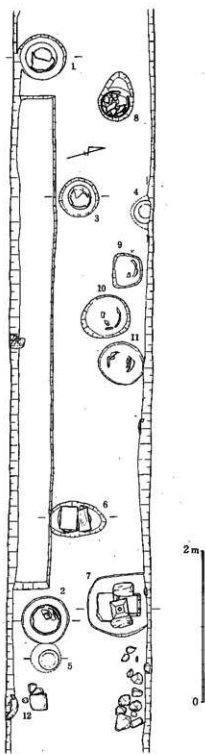


図 16 第4トレンチ近世墓群実測図

程度の円形有機質骨蔵器を収納しその上に平瓦を置き蓋とする。骨片、骨蔵器は認められなかった。

近世墓7

一辺80cmの隅丸方形の土坑を穿ち、有機質の骨蔵器を埋め、その上に五輪塔台座、五輪塔火輪を外部表象としたものである。

以上検出した近世墓は新山古墳群調査時の近世墓群に類似した構造から、同時期と考えられ、江戸時代後期以前に位置づけられる。

4 出土遺物 (図17~18)

出土遺物のうち遺存状態が良好で、底部が完存するものを図化した。

円筒埴輪

図化したものは大半が原位置を保っており底部より第一段タガまでは良好に残っていた。

図17のうち3~7は第4トレンチ墳丘第一段に樹立された円筒埴輪で南壁側から4、5、6、3、7の順に立て並べられていた。1、2、8は後円部墳丘第一段から出土したものである。9は、第1トレンチ周濠底から出土した朝顔形埴輪である。

出土した円筒埴輪は三種類に大別可能である。1と2は、底径16cm前後で出土した円筒埴輪中最小径となるものである。1は残存高12.5cm、第一段タガで胴径20.5cmを計る。基底部から第一段タガにかけては外開きである。タガは幅2.2cm、高さ1.2cmで断面台形を呈する。内外面は磨減が激しく調整は不明である。焼成は不良で白褐色を呈する。2は残存高12.5cm、第一段タガ径18cm、タガは幅1.5cm、高0.8cmで断面かまぼこ形を呈する。焼成が不良で磨減が激しい。

3~5は底径が18~19cm程の中間規模のもので他のものに比べ調整が良く遺存している。いずれも基底部から外開きの形態をとる。3は残存高16.5cm、第一段タガ径22.0cmで、タガは断面台形を呈する。タガ直下より荒いタテハケが残る。色調は赤褐色を呈する。4は残存高18.5cmで強いヨコナデのためタガの断面は横M字形となり、内面にも窪みが生じる。調整は第一段タガまではタテハケ、第二段は連続ヨコハケが認められる。5は残存高19.5cm、第一段タガ径22cmを計り、タガは断面台形を呈する。第一段、二段ともタテハケで調整し、内面にはナメの指ナデが残る。

6~8は底径径が21~24cmのもので他のタイプに比べタガの幅が狭く突出する傾向にある。6は残存高18.5cm、第一段タガが径24.5cmでタガは断面台形となる。磨減が激しく外面調整は不明、内面調整は底部付近からタテ方向に強い指ナデを施す。7は残存高19.0cm、第一段タガが径27.0cmでタガは断面台形を呈する。底部外面に板状工具により調整、内面に指頭圧痕が残る。8は残存高16.0cm、第一段タガが径28.0cmでタガは断面台形を呈する。底部外面にはタテハケの後、一原体分の連続ヨコナデが施され、内面にはヘラ状工具によるナメ方向のナデが観察される。

以上述べた円筒埴輪についてまとめておくと、基底部から第一段タガまでは10~12cm程であり、タガの接合は円筒部に直接貼り付けるものでヘラによる沈線、刺突は行なわれない。また、ハケ原体は条線

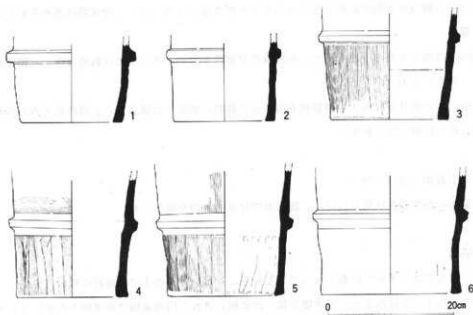


図17の1 石塚古墳出土土円筒埴輪実測図

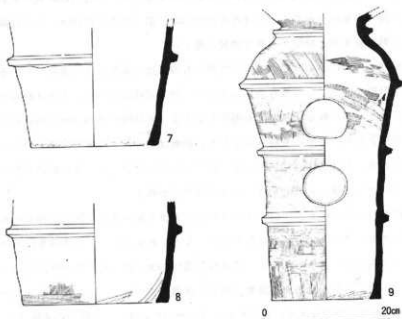


図17の2 石塚古墳出土土円筒埴輪、朝顔形埴輪実測図

間隔の粗いものが使用され4～5本/cm程度のもが多く使用される。胎土は砂粒が多く含まれ、焼成も不良なものが多い。

9は須恵質の朝顔形埴輪で底径17.5cm、残存高45.5cmを計る。底部から第二段タガまでは直線的にたち上り、そこから壺状部にかけては外開きとなる。壺状部からタガを界して鋭角に外反し花びらとなる。透孔は横長の楕円形を呈するものが第二段、三段に連続して穿たれる。タガは幅1.6cm、高1.2cmで鋭く突出する。外面調整は第一段三段にタテハケを施し、カキ目状の調整が施工される。壺状部にはナナメ方向の後カキ目調整がなされる。内面は第三段と壺状部にナナメハケがみられるほか、底部付近にヘラ状工具によるナデ調整がみられる。焼成は堅緻で色調は暗青灰色を呈する。

形象埴輪

形象埴輪は墳丘第二段斜面、段、くびれ部から出土し、襦、短甲、草摺、馬の各種がみられ、そのうち襦、草摺形埴輪を図化した。

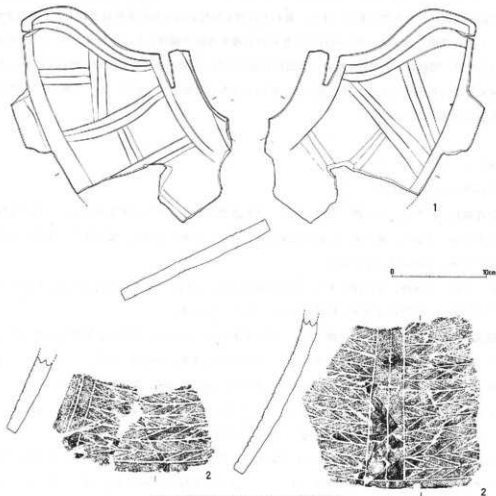


図 18 石塚古墳出土形象埴輪実測図

複形埴輪は十字形立飾の飾板の破片で残存高26.5cm、幅19.0cm、厚さ1.4cmを計る。側線に沿って1条の沈線で文様を区別する。区画された文様は3条の沈線で構成されるが、表裏不一致で文様も形骸化している。

草形埴輪は縦17cm、横18cmの破片である。外縁に沿って1条の沈線をめぐらし、それに3条の沈線が直角に交わる。縦方向の沈線から横位に13条の沈線が約1cm間隔でめぐり、互い違いの斜沈線を施す。類似する表現を持つ短甲埴輪が交野市東車塚南古墳で出土している。

IV 石塚古墳の石材について

1. はじめに

馬見丘陵は砂層や粘土層からなり、数枚の火山灰層を挟む馬見累層が分布する。当古墳付近の地層は大坂層群下部層に相当する。古墳に使用されているような石材をこの丘陵から得ることができない。牧野古墳や新木古墳群、黒石支群の横穴式石室に使用されている花崗岩類、火山岩は西方の二山上を中心とした付近から運ばれたものである。また、墓石の石材も同付近の河原石を採取されている場合が多い。

今回、石塚古墳墳丘のトレンチに残存する墓石の石種を肉眼で観察した。使用されている石材の礫種は黒雲母花崗岩、閃緑岩、黒雲母流紋岩、黒雲母石英安山岩、柘榴石黒雲母安山岩、輝石安山岩、チャート、片麻状黒雲母花崗岩である。基底部には比較的大きな石材が使用されている。石種としては片麻状黒雲母花崗岩が多い。

2. 礫種について

礫種の特徴について述べる。

黒雲母花崗岩 灰白色、歪円礫、円礫である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2mm~4mmで、量が多い。長石は灰白色、粒径が2mm~5mmで、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1mm~3mm、量が中である。

閃緑岩 灰色、歪角礫、歪円礫である。造岩鉱物は長石、角閃石である。長石は白色、粒径が2mm~5mmで、量が多い。角閃石は黒色、粒径が1mm~5mmで、量が多い。

黒雲母流紋岩 灰色、角礫、歪角礫である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、柘榴石である。石英は無色透明、粒径が1mm以下で、量が僅かである。長石は無色透明、短柱状、粒径が1mm以下で、量がごくごく僅かである。黒雲母は黒色、六角形状で、粒径が1mm~1.5mm、量がごくごく僅かである。柘榴石は濃赤色やや透明で、偏菱二十四面体をなすものが多い。粒径が0.5mm~1mmである。量がごくごく僅かであり、礫によっては認められない場合がある。石基は灰色、やや玻璃質で固い。

黒雲母石英安山岩 淡茶色、円礫である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、高温型を示すものと周囲が溶けて球状を示すものがある。粒径が2mmに及び、量がごく僅かである。長石は白色、粒径が2mm以下で、量がごく僅かである。黒雲母は黒色、六角形板状で、粒径が1mm、量

がごく僅かである。石基は灰色、緻密で固い。

柘榴石黒雲母安山岩 灰色、亜角礫、亜円礫である。造岩鉱物は長石、黒雲母、柘榴石である。長石は灰白色、粒径が1mm~1.5mm、量が中である。黒雲母は黒色、六角形板状で、粒径が1mm~1.5mm、量が中である。柘榴石は濃赤色、偏菱二十四面体のものが多く、粒径が1mm以下で、量がごくごく僅かである。石基は灰色、緻密で固い。

輝石安山岩 表面は風化して灰白色であるが、割った内部は黒色である。礫形は角礫、亜角礫で、亜円礫はごくごく僅かである。造岩鉱物は長石、輝石である。長石は無色透明、粒径が0.5mm、量がごく僅かである。輝石は黒色、柱状で、粒径が1mm以下、量が僅かである。石基は黒色、玻璃質で固い。

チャート 灰色、淡茶褐色、暗灰色である。礫形は亜角礫が多く、角礫も見られる。

片麻状黒雲母花崗岩は粒径と組織により3つに区分される。

片麻状黒雲母花崗岩A 暗灰色で、角礫、亜角礫である。顕著な片麻状を示す。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5mm以下で、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5mm以下で、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm以下で、量が多い。

片麻状黒雲母花崗岩B 灰色で、角礫、亜角礫である。片麻状を示す。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1mm~2mmで、量が多い。長石は白色、粒径が1mm~2mmで、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1mm~2mm、量が僅かである。

片麻状黒雲母花崗岩C 灰色で、角礫、亜角礫である。顕著な片麻状を示す。粒径が5mm~10mmの石英の斑晶が片麻状の方向と平行に並ぶ。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、斑晶をなす以外に粒径が1mm~2mmのものが多い。長石は白色、粒径が2mm~5mmで、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1mm~2mm、量がごくごく僅かである。

3. 石材の使用傾向

葺石の配列から判断すれば、図に示すように区切り（工区）を設けて並べられたことがうかがえる。基底の葺石には花崗岩類が多く、かつ、礫形も大きい。しかし、上段の葺石は輝石安山岩礫が圧倒的に多く、礫形は小さい。礫種構成からみれば、前方形前面の敷石には片麻状黒雲母花崗岩Bが主として使用されている。前方形北側では片麻状黒雲母花崗岩Bと黒雲母流紋岩が主として使用され、くびれ部の北側では輝石安山岩が主として使用されている。上段の葺石では北側に主として輝石安山岩、中央部に輝石安山岩を主とし、チャート、黒雲母流紋岩、片麻状黒雲母花崗岩A、黒雲母花崗岩、閃緑岩等が含まれる。南側の部分については一部のみしか観察できないため、使用傾向は判断しがたい。

4. 石材の採取地

使用されている石材と同じ岩相の岩石の分布地を近距離で求める。石材の形から判断すれば露出地から節理面等を利用して割り出した石材は認められない。表面が風化しているものや角が円磨されていることから、露出地の転石や川原石を採取したと推定される。

黒雲母流紋岩は石英や長石が細粒で僅かに黒雲母が含まれ、柘榴石が含まれることがあることから、大和三山の一つ耳成山の流紋岩、二上山雌岳の頂上部から東斜面に分布する流紋岩の岩相に類似する。二上山の東山麓では円くなった流紋岩礫が見られる。しかし、耳成山山麓では角礫のみしか認められない。

黒雲母石英安山岩は溶融された石英が含まれることから二上山西方寺山一帯に広く分布する寺山火山岩の岩相の一部に類似する。重円礫であることから、川原の礫であろう。

柘榴石黒雲母安山岩は柘榴石を含み、流理が顕著で、自形の黒雲母を多く含むことから、二上山西山麓部に分布する石切場火山岩の岩相の一部に類似する。角が円くなっていることから逢坂川の川原石であると推定される。

輝石安山岩は玻璃質であることから、石まくりや春日山の安山岩に類似する。また、逢坂川の川原石にも同様の礫が認められる。

片麻状黒雲母花崗岩Bは、岩相的に当麻から二上山へ登る谷に転がる片麻状黒雲母花崗岩礫に類似する。また、片麻状黒雲母花崗岩Cの礫もごく僅かに見られる。片麻状黒雲母花崗岩Cの礫は竹内付近の谷川に比較的多く見られる。

以上のことから、石材の採取地は当麻から二上山へ登る谷、逢坂川の川原石、石まくりや春日山の山麓付近の3箇所が推定される。逢坂川の川原石にはチャート、黒雲母花崗岩、閃緑岩、輝石安山岩、柘

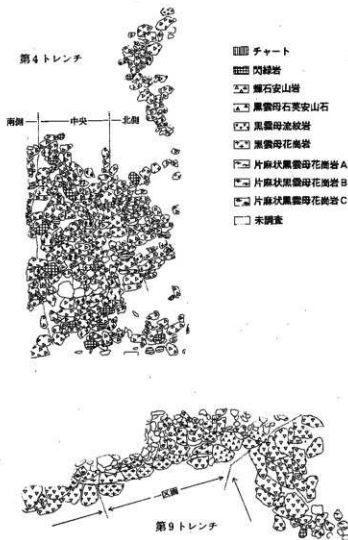


図 19 石塚古墳墓石石材鑑定図

榎石黒雲母安山岩、黒雲母流紋岩等が見られる。

5. おわりに

ごく一部の葺石しか調査していないが、石材の配列からみた区切り毎で、輝石安山岩を主として使われていることには変わりがないが、若干石材の種類を異にしている。輝石安山岩以外の石材の採取地と葺かれている位置には関係がみられる。前方部の葺石は当麻から二上山へ登る谷付近から運ばれた石で葺かれ、上段の中央部葺石は逢坂川の川原石である。上段の北側では輝石安山岩が使われている。このことは、一定の与えられた区切り内に葺石を葺くのに石材の採取地を異にしていたと言える。また、石材を一定の場所に積み上げ、適材適所に使ったのではなく、決められた範囲内にどんどんと葺いていったことがうかがえる。上段の一つの区切りに石を葺くのに割り当てられた人数は推定できないが、労働量からみれば、現存の範囲に石を葺いたとして、石材の採取に1人1日40kgの石をかっいで一往復するとしても10日間で十分にこなせる量である。

前方部を造るのには当麻西方の石材が使われ、上段の葺石を葺くのには逢坂川の川原石が使われている。このことは、古墳造営時どのような割り当て方をしたためであろうか。

V 結 語

調査は史跡指定の基礎資料を得るため、墳丘規模・範囲の確認を目的として行なった。以下明らかとなった諸点をまとめ、結語にかきたい。

1. 古墳は、南北走向の主幹丘陵から西北西方向に派生した小支丘を利用し、地山整形によって築かれたもので従来、円墳と認識されていた。測量の結果、全長45m、後円部径40m、後円部高65m、前方部長7m、前方部前幅22.5m、前方部高3mを計り、東面する帆立貝式古墳であることを確認した。
2. 周濠は地山を削り出してつくられており、濠底で幅約3m、深さ約1m程と考えられ、墳丘側、外堤側に向け約1.5mほど葺石が施されたと考えらる。ただし、前方部では濠底幅は1.5mと縮小する。外堤は後円部で8m、前方部で5m程であったと考えられる。
3. 葺石は各トレンチで確認し、周濠部、墳丘部に葺かれていたことを確認した。特に前方部とくびれ部では葺石の施工法、施工単位が明瞭に観察できた。施工単位、施工箇所で石材種が異なり、施工技術、工程を考える上で重要な資料を得た。
4. 円筒埴輪は墳丘第一段テラスに密に樹立され、数本単位に朝顔形埴輪が立てられたと考えられる。これらの埴輪期は、断続的なヨコハケが認められず、器面一次調整のタテハケを残すものがあることから5世紀末～6世紀初頭と考えられる。(註1) 形象埴輪は、墳頂部、くびれ部に立って並べられたと考えられる。
5. 石塚古墳は馬見古墳群の中央グループで行なわれた累世的な造墓過程のうち衰退期に築造されたことになる。また衰退期に築造された古墳にも係わらず、葺石材を他地域から搬入して全面に葺石を施す

ことは、馬見古墳群の中規模古墳では異例である。

この原因を馬見丘陵全体の造墓動向のなかでとらえると、馬見古墳群のうちの大型古墳、大塚山古墳、栗山古墳、新木山古墳、築山古墳が中期の比較的かぎられた時期に築造され、規模も伯仲している。また、これらがそれぞれのグループごとに累世的な造墓活動を行なうことから、各グループが相互に密接な関係を持つ政治集団であり、輪番的に首長権を握るような政治体制が、かつて想定されている。(註2)

今、仮に上記の想定をさらに押し進め石塚古墳と周辺地域を見れば、ほぼ同時期に河合大塚山古墳が築造されている。とすれば、該期に北葛地域の首長権を握っていたのが北群であり、石塚古墳は中央群という小地域内での首長墓系列の奥津城であった可能性がある。

註1 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻第2号』考古学研究会によればIV期後半期が考えられる。

註2 白石太一郎・前園実知雄「馬見丘陵における古墳の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物報告第29冊』奈良県教育委員会。

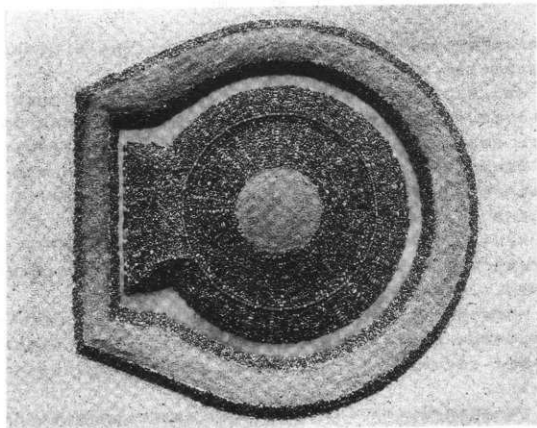


写真4 石塚古墳復元想定模型(1/600)

昭和62年度

新木山古墳外堤

範囲確認調査概報

例 言

1. 本書は、広陵町教育委員会が昭和62年度国庫補助事業として実施した奈良県北葛城郡広陵町大字三吉元赤部小字新木山所在の新木山古墳外堤の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は橿原考古学研究所の指導を得て、広陵町教育委員会事務局社会教育課が実施し、現地調査は井上義光があたった。
3. 調査にあたっては広陵古文化会、同会長坂野平一郎氏、文化財保護調査会、大字区長である藤井清治氏に御理解と御協力を賜った。記して感謝します。
4. 調査補助員として浅尾一宏、杉田雅彦（大阪外国語大学）、植松洋（京都大学）、多田慶子の諸氏が参加した。
調査作業員として生島義二、松井正一、吉岡敏夫、平井藤太郎、吉崎清七、藤井清治、野村千代治の諸氏が参加した。
出土遺物の整理作業にあたっては多田慶子氏の協力があった。
5. 本書の執筆及び編集は井上が行なった。
6. 第4図に使用した「三吉陵墓参考地之図」は宮内庁書陵部の承諾を得て掲載した。

目 次

I	はじめに	1
II	調査の概要	2
1	古墳の立地と現状	2
2	各トレンチの調査概要	3
3	出土遺物	5
III	まとめ	6

I はじめに

新木山古墳は、奈良盆地の西辺に位置し、南北走る馬見丘陵に築造された大型前方後円墳である。この馬見丘陵には数十基の古墳が築造され、馬見古墳群と総称され、古墳の分布状況によって北群、中央群、南群に区別されている。今回調査した新木山古墳は特別史跡築山古墳、史跡乙女山古墳と共に馬見古墳群のうち中央群の盟主的古墳で、墳丘部は、現在官内庁によって三吉陵墓参考地として指定され、

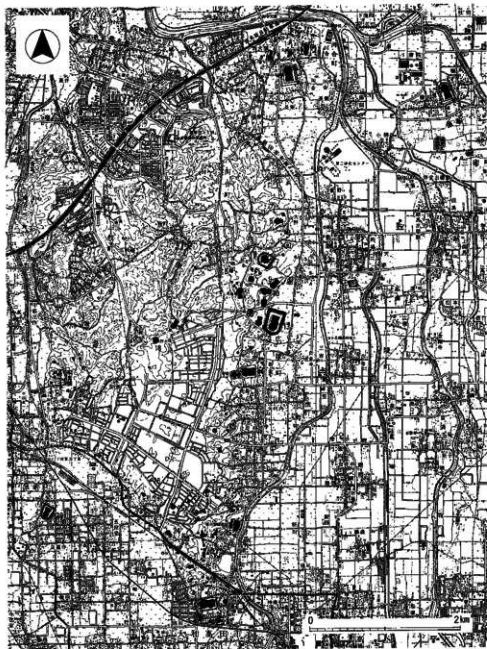


図 1 新木山古墳周辺の遺跡 (11新木山古墳)

保存、管理されている。

発掘調査は馬見丘陵南部から迫る宅地開発、土地造成等から古墳を保護し、史跡指定を受けるため、広陵町教育委員会が昭和62年度国庫補助事業として範囲確認調査を実施したものである。

事業計画については、奈良県教育委員会文化財保存課の指導を受け、調査については奈良県橿原考古学研究所の助成のもと広陵町教育委員会がおこなった。

調査は虫食的な開発に侵蝕されつつある外堤部に集中し、測量図の作成と外堤・周濠の範囲を確認するため南北方向に5ヶ所トレンチを設定し行なった。

調査は昭和62年7月26日から9月8日まで昭和63年1月11日から1月18日まで2回に分けて行なった。

II 調査の概要

1. 古墳の立地と現状

新木山古墳は奈良盆地に東面した前方後円墳で、高田川と佐味田川に挟まれた南北走向の低位丘陵から東へ派生する小支丘を利用して築造されている。後円部は丘陵基幹部を利用し、後円部東側周濠も地山を削り出して築造されたと考えられる。

本墳は、馬見古墳群のうち中央群に包摂されるが、古墳が最も密集する特別史跡栗山古墳、史跡乙女山古墳からやや離れて築かれている。周辺には帆立貝式古墳である石塚古墳以外、小規模な円墳が伴うのみである。

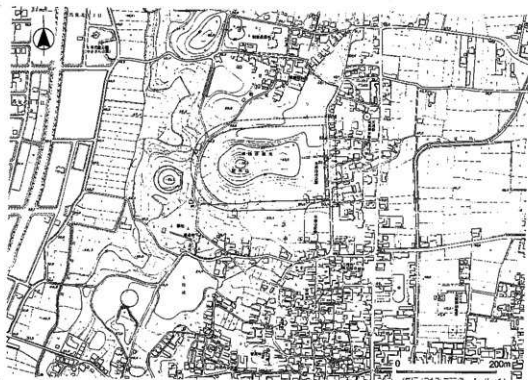


図 2 新木山古墳周辺地形図

野淵電潜の「古墳墓取調図」(図3)によれば、墳丘部は松林となつて広葉樹が密生している。

また、帝室林野局が昭和三年に作成した「御陵墓参考地之図」によれば、宅地化がすすんでいる以外は、水田、畑、ため池の変更はない。

墳丘測量図は「三吉陵墓参考地之図」に周辺地形を等高差25cm、縮尺を1/200で行ない作図した。測量図から墳丘規模を観察すれば、墳丘全長200m、後円部径117m、同高19m、前方部幅118m、円高17mという数値が得られる。墳丘主軸は $N-92^{\circ}-W$ にあり、西くびれ部に透り出しが存在する。墳丘基底は後円部で53.80m、北側くびれ部で53.40m、南側くびれ部で52.40m、前方部で52.20m~51.60m程で、西から東へ緩傾斜となる。

周濠は、後円部から南側は水田又は畑となっており、前方部では宅地化している部位もある。北側は灌漑用池が掘られている。幅は後



図3 新木山古墳絵図(野淵電潜作図)

円部で18m、前方部で22m程である。外堤は、水田、畑の畦畔として残っており、幅約20m前後と予想された。

2. 各トレンチの調査概要

調査トレンチは外堤規模を確認するため、後円部で1箇所、くびれ部付近で2箇所、前方部で1箇所、南北方向に設定し、最後に外堤外の施設の有無を確認するためのトレンチを設定した。

第1トレンチ(図6. 図版2)

後円部側の外堤築成状況を観察するため設定したが、私道があるため、北と南に分け調査した。

図示したのは第1トレンチ北の西壁であり、周濠部では耕作土下約50cmで黒褐色を呈する粘質土層が検出され、その直下は基盤層になる。

また、この黒褐色を呈する包含層を切り込む井戸を検出した。井戸は、灌漑用の井戸である。

外堤の層位を抽出したのが図7である。第6層~23層までが外堤の盛土であり、第5層は耕作土層である。各トレンチの円で互層積が明確に判別でき、第6層が層厚20~30cmの赤黄色系の粘土層で、その下に層厚40cm前後の同色砂質(第7~9層)がある。さらにその下には黄灰色系の粘土層が積まれている。

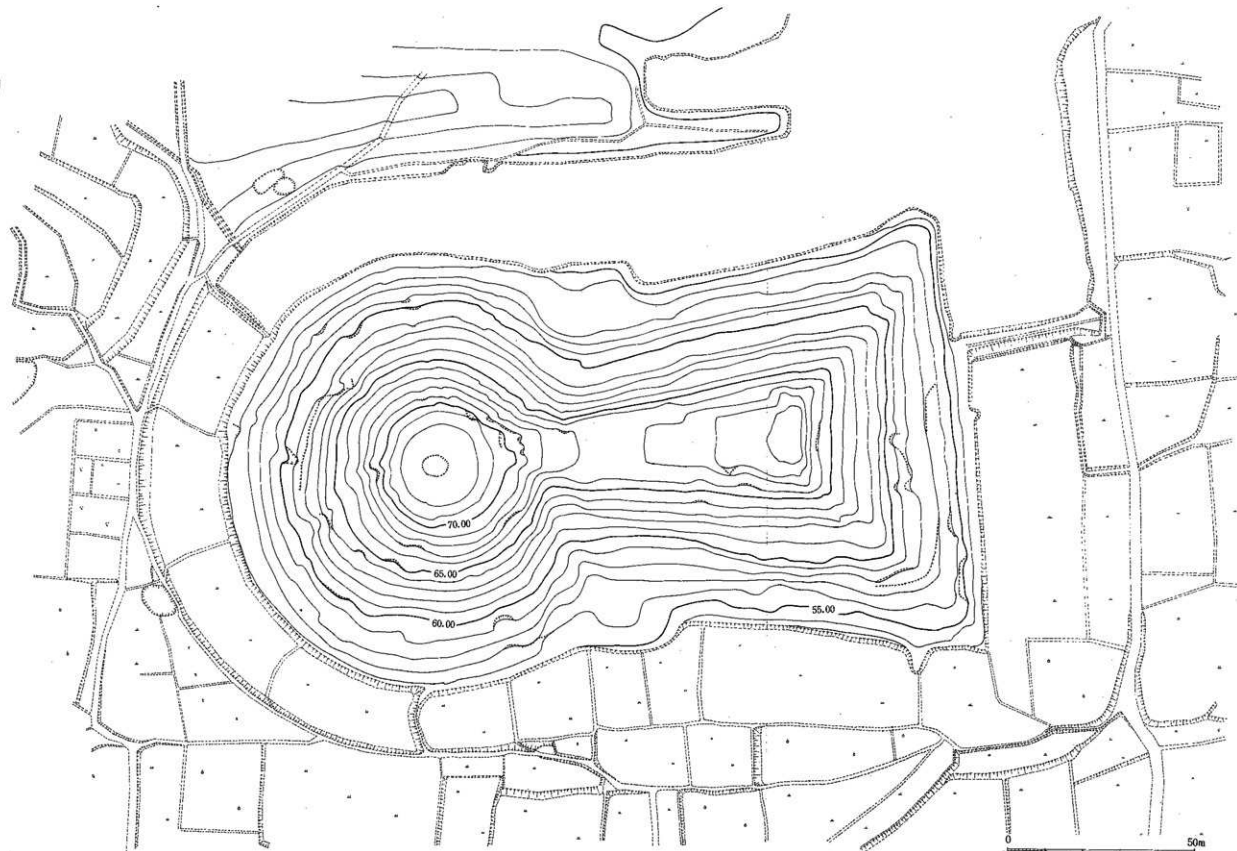


图 4 新木山古墳測量図 (三吉陵基参考地之図に加筆)

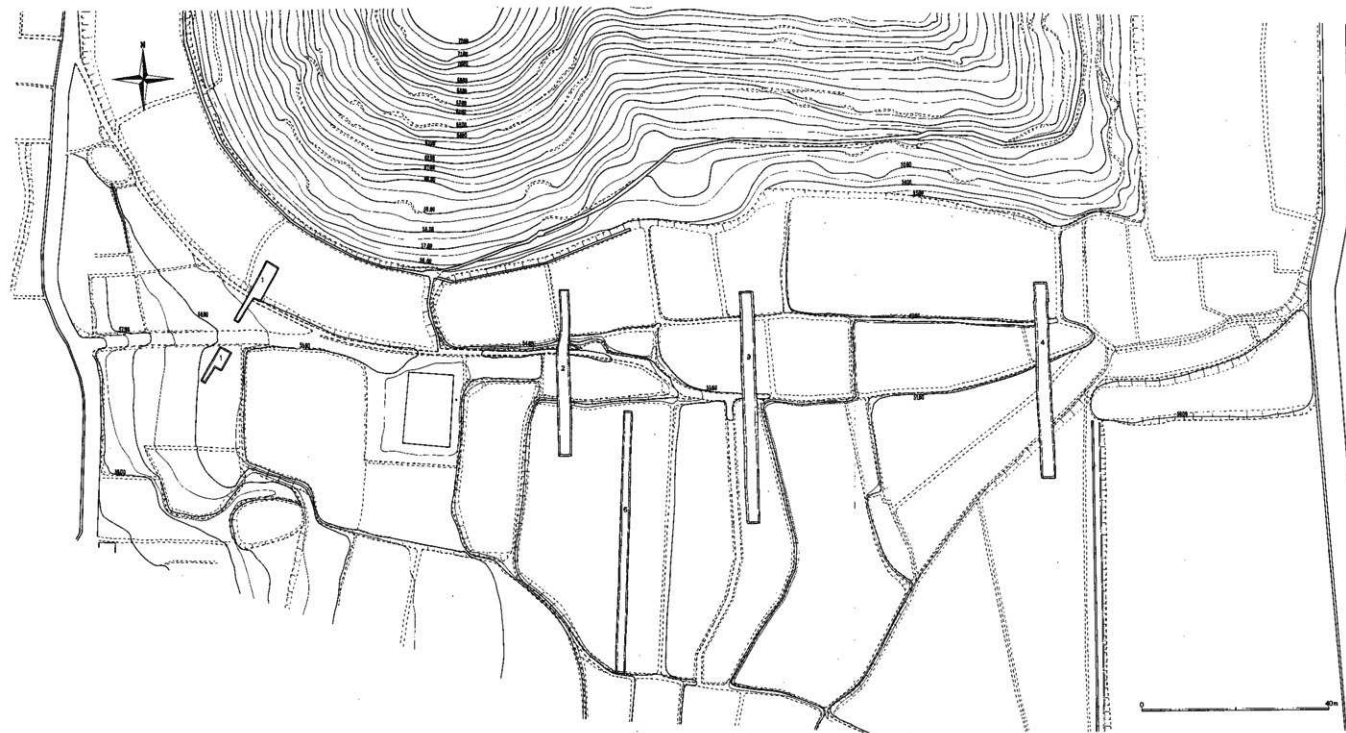


図 5 新木山古墳外境トレンチ配置図

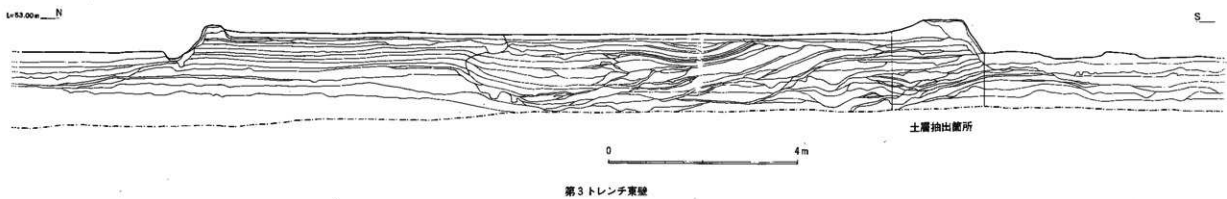
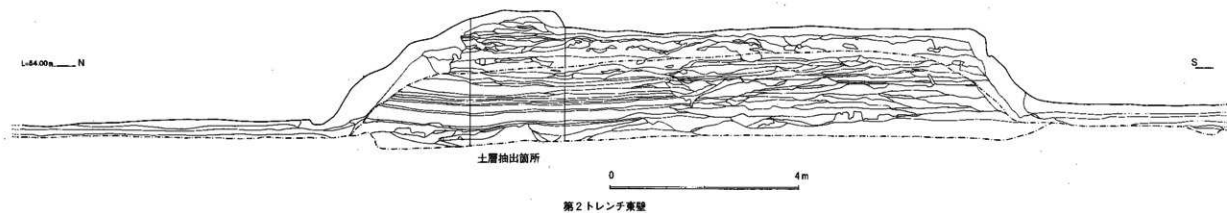


図 8 新木山古境外境調査区土層断面

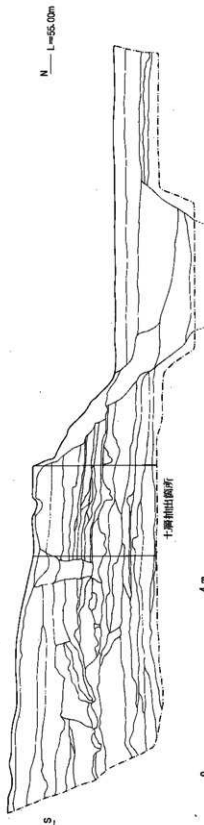


図6 新木山古墳外堤第1トレンチ西壁土層断面

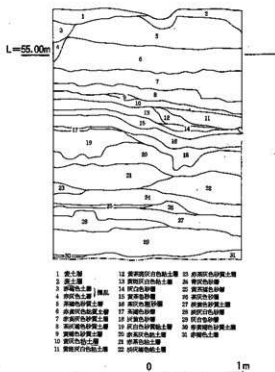


図7 新木山古墳外堤抽出土層断面(第1トレンチ)

た。(第10～13層)、第14～19層は粒子の荒い砂質土で19層は下部層の粘土が混入する。そして、第20層以下は赤褐色系の粘土が主体でいずれも密度が高い。

第2トレンチ(図8. 図版3)

第2トレンチはくびれ部付近から周濠、外堤にかけて幅3m、長さ35mで設定したトレンチである。表土層以下1m余りが盛土でそれ以下は基盤層である。層序は第1トレンチのように明確ではなく、明赤黄色系の砂質土又は、砂層中に灰白色系粘土ブロック(第5層)黄灰色系粘質土ブロック(第10,11層)が入り込む状況であった。第15層以下は赤黄色系の砂層又は砂質土層が堆積する。

周濠部の堆積は薄く耕作土、床土を除くと13世紀後半の瓦器を含む黒褐色粘質土層が層厚10cm程残るのみで、その下は基盤層となっている。標高52.50

mである。

第3トレンチ (図8, 図版4)

第3トレンチは、外堤が畦畔としてその幅を予想した部位に南北方向に幅3m、長さ49mで設定した。

第3トレンチでは外堤盛土は検出されず、基盤層上に外堤築成時の整地層を確認したに留まる。

整地層は外堤の南端から幅約16mの旧地形を埋め平坦面を造成するために行なわれたもので抽出した土層のうち第24層以下は基盤層である。従ってそれ以上は整地土層で灰白色系の細砂層と、赤褐色系の粗砂層が不規則に堆積する。

第4トレンチ (図5, 図版5)

第4トレンチは前方部の外堤幅を調べるため幅3m、長さ41.5mで設定したが、地山まで削平されており、現在の畦畔に沿った地形を検出したのみである。

第5トレンチ (図5, 図版6)

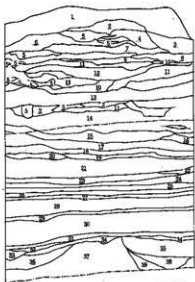
第5トレンチは農閑期を待って外堤外に幅2m、長さ55mで設定した。ここも地山直上に中世の土器包含層が薄く残るのみであった。

3. 出土遺物

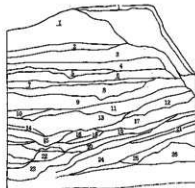
今回の調査による出土遺物は、調査面積を考慮すれば、量は寡少である。図化した遺物は全て中世包含層中に混入していた円筒埴輪である。

1はタガ部分の破片である。残存高58cm、タガは幅14cm、高さ0.6cmで断面台形である。外面はタガ設定時のヨコナデが残る。断片の下端部に「冂」形の切れこみがあり、方形スカシであることがわかる。色調は白褐色を呈する。

2もタガ部分の破片である。残存高4.5cm、タガは幅1.8cm、高さ0.9cmで断面台形である。外面にはタガ設定時のヨコナデが残る。焼成は不良で茶褐色を呈する。



- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1 黄土層 | 14 赤褐色粗砂層 | 17 赤褐色粗砂層 |
| 2 灰白色砂層 | 15 暗褐色粘砂層 | 18 灰白色粘砂層 |
| 3 耕作土層 | 16 赤褐色粘砂層 | 19 赤褐色粘砂層 |
| 4 赤褐色粘砂層 | 17 灰白色粘砂層 | 20 赤褐色粘砂層 |
| 5 灰白色粘砂層 | 18 赤褐色粘砂層 | 21 灰白色粘砂層 |
| 6 赤褐色粘砂層 | 19 灰白色粘砂層 | 22 赤褐色粘砂層 |
| 7 赤褐色粘砂層 | 20 赤褐色粘砂層 | 23 赤褐色粘砂層 |
| 8 赤褐色粘砂層 | 21 赤褐色粘砂層 | 24 赤褐色粘砂層 |
| 9 赤褐色粘砂層 | 22 赤褐色粘砂層 | 25 赤褐色粘砂層 |
| 10 赤褐色粘砂層 | 23 赤褐色粘砂層 | 26 赤褐色粘砂層 |
| 11 赤褐色粘砂層 | 24 赤褐色粘砂層 | 27 赤褐色粘砂層 |
| 12 赤褐色粘砂層 | 25 赤褐色粘砂層 | 28 赤褐色粘砂層 |
| 13 赤褐色粘砂層 | 26 赤褐色粘砂層 | 29 赤褐色粘砂層 |



- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 1 黄土層 | 10 赤褐色粘砂層 | 13 赤褐色粘砂層 |
| 2 黄土層 | 11 赤褐色粘砂層 | 14 赤褐色粘砂層 |
| 3 赤褐色粘砂層 | 12 灰白色粘砂層 | 15 灰白色粘砂層 |
| 4 赤褐色粘砂層 | 13 灰白色粘砂層 | 16 灰白色粘砂層 |
| 5 赤褐色粘砂層 | 14 赤褐色粘砂層 | 17 灰白色粘砂層 |
| 6 赤褐色粘砂層 | 15 赤褐色粘砂層 | 18 赤褐色粘砂層 |
| 7 赤褐色粘砂層 | 16 灰白色粘砂層 | 19 赤褐色粘砂層 |
| 8 赤褐色粘砂層 | 17 赤褐色粘砂層 | 20 赤褐色粘砂層 |
| 9 赤褐色粘砂層 | 18 赤褐色粘砂層 | 21 赤褐色粘砂層 |

図9 第7トレンチ西壁土層断面図

3もタガ部分の破片である。残存高5.5cm、タガは幅2.2cm、高さ1.2cmで断面台形である。外面にはタガの接合痕跡が残る。色調は灰褐色を呈し、黒斑が残る。

資料が断片で帰属期を推測することを憚られるが、黒斑を持つ断片と方形スカシのある個体が存在することから川西福年のⅢ期、赤塚福年のⅡ期、1段階に比定出来る。

Ⅲ ま と め

今回の調査は、史跡指定の基礎資料を得るため、外堤の規模、周辺施設の有無を確認することを主眼として調査したものである。今回の調査で明らかとなった諸点をまとめて結語にしたい。

1. 古墳は南北走向の低位丘陵から東にのびる小支丘を切断し、主に地山整形によって築かれた前方後円墳で、測量図から墳丘全長200m、後円部径117m、同高19m、前方部幅118m、同高17mを測定する。

2. 周濠幅は後円部で18m、前方部で22mを計り、濠底レベルは西から東にかけて緩やかに下がっていたと予想されるが、中世に濠底まで削平されていた。外堤幅は現在の畦畔にはほぼ一致し20~22mと考えられ、外堤の高さは3m以上有していたと考えられる。また築成は旧地形を整地した上に行なわれたことも判明した。

3. 古墳の築造時期は、出土した円筒埴輪断片が方形スカシと、野焼きと考えられる黒斑を有することから、川西福年のⅢ期、赤塚福年のⅡ期、1段階ととらえられることから5世紀の前半と考えられる。

4. 馬見古墳群に築造された大型前方後円墳の築造経過からみれば、築山古墳に後継し築山、川合大塚山古墳に先行するものと考えられる。

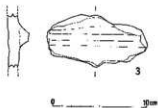
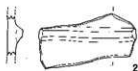
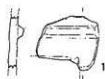


図 10 新木山古墳外堤調査
出土円筒埴輪実測図

圖 版



全取 (西側の)



全取 (東側の)



全貌 (南から)



全貌 (北から)



全貌 (図4の1)



石塚古墳入口 (図4の2)



墳丘葺石検出状況（東から）



埴輪列検出状況（北から）



図版5 石塚古墳第8トレンチ



図版5 石塚古墳第8トレンチ



くひれ部開口 (東向き)



くひれ部開口 (西向き)



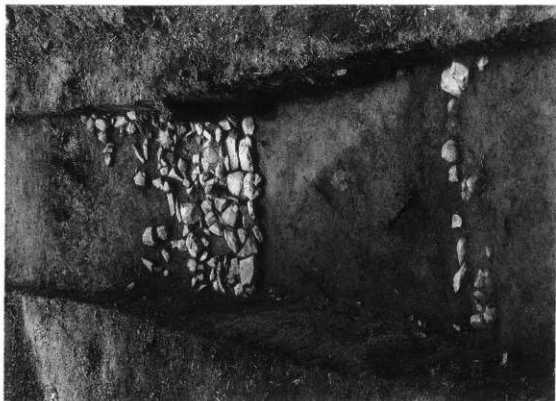
くびれ部全景 (北から)



くびれ部葺石 (北から)



くびれ部葺石細部 (北から)



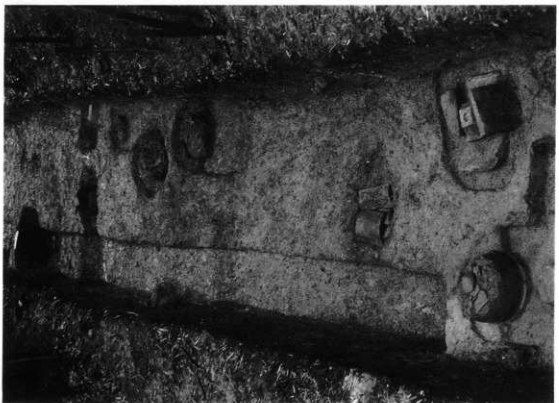
第3トレンチ石塚古墳入口 (図版8)



第6トレンチ石塚古墳内中世室 (図版8)



近世遺群全景 (西から)



近世遺群全景 (東から)



近世墓7



近世墓4



近世墓12



近世墓2、5



近世墓2



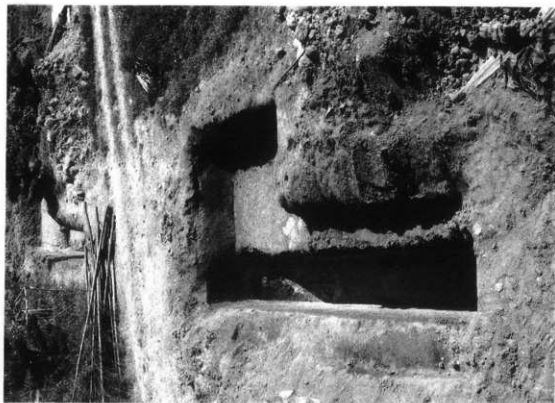
近世墓5



外堤全景 (西から)



外堤全景 (東から)



全景 (東より)

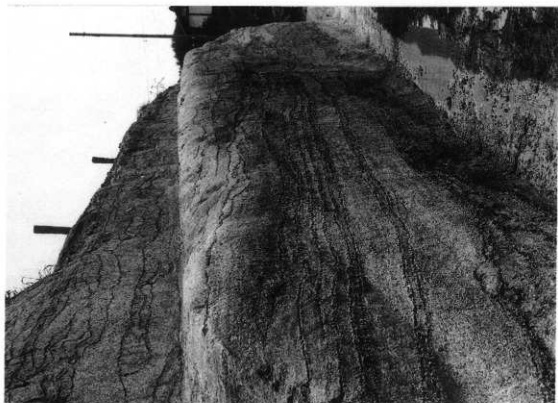


土層堆積状況

図版3 新木山古墳外堤第2トレンチ



全概 (北より)



土層堆積状況



全景 (南から)



土層堆積状況

図版5 新木山古墳外堤第4トレンチ



全断面 (北から)



全断面 (南から)



全景 (南から)



土層堆積状況



別添図 石塚古墳周辺測量図 (1/500)

広陵町埋蔵文化財調査概報 1

昭和62年度

石塚古墳範囲確認調査概報

新木山古墳外堤範囲確認調査概報

昭和63年3月31日

発行 広陵町教育委員会

印刷 橋本印刷株式会社